

吉田松陰の教育（その一）

橋 田 義 雄

緒 論

二宮翁夜話の中に、次のような話がある。1人の儒者が、尊徳先生の愛護を受けて、子弟を教えていた。或時、その儒者が、酒に酔うて路傍に寝ていた。所がその醜態を弟子の一人が見て、不快な事に思い、その翌日から教えを受けにこなくなったというのである。此の儒者は、これを憤り二宮尊徳のもとにきてこう言った。「自分の行跡がよくなかったということは、否定しないが、自分が教えている儒学は、聖人の書であって、その所説を講述する処には、何の誤ちもない。随って塾をやめてしまう必要はないのではないか、どうか今一度先生から説得して戴いて、塾にくるように、計ってほしい」というのである。之に対して、尊徳先生は、糞桶の例をひいて教示している。

「今私が譬をもって云うならば、こゝに米がある。之を飯に炊いて、そのおいしい飯を糞桶に入れて出すとすれば、君は之を食べるか、たとえ、その桶がきれいに洗ってあったとしても、君は食わないのではないか、之を食うのは只、犬だけであらう。君の学問も是と同じで、元々、立派な聖人の学ではあるが、君の糞桶のような口から出てくるので、弟子も食いたくないわけであらう。聴講しないからといって、腹を立てる筋もなからう……。」と教えたのである。儒者は、自分の愚を覚り謝って帰ったという。

私は、此の糞桶の話を読み出すたびに、此の儒者において、自分自身の姿を反省させられると同時に、吉田松陰を想起せざるを得ないのである。松陰は、講孟餘話の中で、師道を論じて次のように説いている。

「近時に至り、師道益々廢す。余因て、其源を洞察し、又一説を得たり。大抵師を取る事易く、師を撰ぶ事、審ならず。故に師道輕し、故に師道を興さんとならば、妄に人の師となるべからず。又妄に人を師とすべからず、必ず真に教ゆべき事ありて師となり、真に学ぶべきことありて師とすべし……」

(松陰全集二卷講孟餘話)

松陰は正に、口述の学を廢し、実践の学を説き、自ら常に求道の態度で学問したのである。松下村塾の成果は、之を一言にして言えば、松陰その人の人格にありというべきであろう。現下教育の最大の欠陥は、教うべきこともない多くの者が師となり、選ぶべきすべもない多くの子弟が、何の尊敬もしない師から教を受けねばならない制度にありと言うも過言ではないであらう。

(一) 吉田松陰の略伝

時代	年齢	経歴
天保元年 (1830)	誕生	萩松本村の護国山の麓、杉百合之助の第二子、樹々亭に生まる、19才迄すごす。田畑を耕す、四書五経を父より習う。
全 6 年	6 才	叔父吉田大助の養子となる。山鹿流兵学師範の家を継承す。玉木文之進より兵学、経史の手ほどきを受く。
全 10 年	10 才	藩学明倫館に兵学師範として出勤、後見人山田宇衛門、林真人、石津平七
全 11 年	11 才	毛利敬親公の前にて武教全書を講ず。
全 13 年	13 才	玉木文之進、松下村塾を起す。子弟は、兄梅太郎、久保清太郎等。
弘化元年 (1845)	15 才	孫子虚実篇を藩主に講義す。将来を嘱目さる。山田亦介より長沼流兵学を習う、東亜の大勢を聞き国士たらんとす。
嘉永元年	19 才	独立の師家となる。山宅より松本村清水口に移る。杉家の人達も同居。
全 3 年	21 才	8 月25日、萩を發し、長崎にいたる。山鹿万助、葉山佐内等にあう(西遊日記)。
全 4 年	22 才	江戸藩邸に入る。安積良斎、古賀茶溪、山鹿素水、佐久間偉山等に接す。
全 6 年	23 才	12月5日、東北に遊ぶ(東北遊日記)、罪を得て土籍を削らる。

全 7年	24才	米艦浦賀に来る。士分に復帰す。9月18日、長崎にて口艦に乗らんと志ざして江戸を立つ。10月27日長崎着、口艦すでに出航す。
安政元年	25才	3月5日、米艦に金子重輔と乗艦せんとして失敗、4月29日、伝馬町入獄、10月24日、萩の野山獄に移る。
全 2年	26才	獄中にて此の年、1ヶ年に600冊を読了す。4月12日より、獄囚に対して孟子を講ず。6月13日よりは、輪講をなす。12月15日、獄を許され杉家に帰る。近隣の子弟密に來りて学ぶ。12月17日より孟子を講ず。
全 3年	27才	6月13日迄に55回に及ぶ、講述の内容は講孟余話として全集の二巻にあり。黙霖と文通し国体論、時務論について論ず。12月18日、梅田雲濱と会す。門人数14名。
全 4年	28才	久保清太郎、松陰と共に邑学の振興につとめ、久保塾と松下村塾とは一体となる。富永有隣野山獄を出て村塾の師となる。11月5日、杉氏の小舎を改築、塾生42名の多きに達し、高杉晋作、久坂玄瑞、前原一誠等の名あり、世の活目する処となる。
全 5年	29才	1月6日、狂夫之言を草し、天下の大患を論じ世人の覚醒を促さんとす。3月11日、門人等と塾舎を増築す。4月、井伊直弼大老となる。5月16日、対策愚論を梁川星巖に贈る星巖之を孝明天皇に供す。井伊大老の違勅、開港を憤り「議=大義-」の一篇を草し、藩主に奉る。7月16日には「時義略論」を著し、征夷大義を奉ぜざれば断呼之を討つべしと極論し藩府に上申す。水野土佐守の暗殺策、大原三位の萩下向策、伏見獄の勤王の志士救済策等、種々策すれど功ならず。11月6日、同志17名と血盟し間部老中要撃策を画するも藩府之を憂へて松陰を厳囚せしむ。12月5日、投獄の命到る。
全 6年	30才	1月24日、松陰のいう勤王責幕運動と門人のいう時期尚早論とが一致せず、松陰憂悶の情やる方なく、絶食して死生を天に聞かんとす。26日、門弟の入江、野村、吉田、品川等放免せられるを聞き歡喜して絶食を中止す。2月24日、伏見要駕策を遂行せんとして野村和作を上京せしめたが之も失敗す。4月19日、幕府より東送の命下る。5月14日、門人知己に別れを惜しみ、24日夕刻、司獄福川犀之助の厚意により、父母の膝下に最後の夜を過す。7月9日、江戸伝馬町の獄に下る。10月20日、杉家の父や兄に永訣の書を送る“親思う心にまざる親心今日の音づれ何と聞くらん、”の歌あり。26日、留魂録を作し、その巻頭に“身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも、留置まし大和魂、”と歌う。翌27日正午頃、 “吾今為 _レ 国死、死 _{不_レ負_二君親_一、”}

		悠々タル天地ノ事，鑑照在=明神-。 と辞世の詩を誦し，従容として死に就く。29日，桂小五郎，尾 寺新之丞，飯田正伯，伊藤利輔の4人，遺骸を受取り橋本左内 の横に葬る。
--	--	--

(二) 吉田松陰の教育者の性格

(1) 愛の心

◎松陰は，熱烈燃ゆる志士的精神の所有者であると同時に，まことに愛情濃やかな人間味の豊かさを有していた。此の豊かな愛の情操の源は，その搖籃を愛の家庭に発しているといつてよい。20餘石の下士としての松陰の家庭は，平和ではあったが，豊かではなく，貧しさの中に育つたというべきであらう。父母，兄弟，妹と8人暮しの家庭生活は，まことに平和で，温情溢れ，かつて兄弟喧嘩を見た事なく。父は厳なりと雖ども，父子事を構えて争論する等のこともなく，至孝の兄弟は，その父に任えて従順そのものであった。母の瀧さんは，賢母の名も高く，その姑に仕えて至孝，姑の妹，岸田氏が家貧しく，杉家に寄食していたが，久しく病に伏していた。瀧女は，民治，虎次郎芳子の三子女をかかえ乍らも，苦にすることなく，遂には病人の汚穢を洗滌するという看護で，姑は泣いて之を謝し，見る者，為めに涙を流すという慈愛の人であった。

(全集十卷19頁，太夫人実成院行状)

私がかつて，松陰幼時の住家である樹々亭に遊び，その門前に聳える椎の木の下に落ちた椎の実を，兄妹仲良く拾って遊んだという話を聞き，睦みあっていたであろう松陰兄妹の姿を臉に描き，兄妹愛髣髴たるすがたに感激したものであった。

かくの如き環境の中に育つた松陰が，その親に仕ふるに至孝，その兄妹に接するにやさしく，その親戚を遇するに厚く，純情にして愛の心の豊かなるは，故ある哉である。此の愛の心こそ，彼の信念，気魄と相まって，あの偉大なる教育的事蹟を生むにいたつた源泉である。

◎嘉永5年、松陰は、亡命の罪を得て、自家にひきこもったのであるが、父は慰諭して曰く、“汝が素志遠大なり一たび誤るも、国に報ゆるは尚時あり、豈勤めざるべけんや”と叱責するよりも、むしろ激励している。

(杉恬齋先生伝、全十卷)

◎安政2年12月、許されて野山獄を出、懐かしいわが家に松陰が戻った時、一家の喜はこの上なく、父は、親戚門人を、杉家の一室に集めて読書会を開かんと計画し、かくてひそかに塾が開かれ孟子の講読が始められている。

◎安政2年4月12日、野山獄における松陰は、長年月の間、天日を見ることなく、その一生を岸獄に終る11人の囚人を見て、嗟愕して涙下り、己の囚人たるを悲しむ暇なく、皇国に生まれて皇国の人たる所以を知らざれば、禽獣に変わる所なし、と激励し、彼等をして自暴自棄の淵より救い上げんと決意し、義を講じ道を説き、8月26日、兄梅太郎に次のような書を送っている。

「往昔、含盃の事盛なる時は撻が忙敷と申立、夜燈を願ひ、撻は不撻して盃を含み、或ひは、蠟燭を燈し、酒を飲み、又盆に獄中へ燈籠を燈したるなど、とへうしげな事も有、之たる由なれ共、今は、時勢不、同且一同申合厄害引起さざる約定にて、万一約定に違ひ不法之事も有、之候へば、連中より互に気を付合候様可、致候」(岩波文庫吉田松陰書簡集40頁)と書き送った程に獄中教育は改善の方向に向かっているのである。

人は自分が不幸の中にいる時、同じ不幸の中にいる人に対して、同情心を持つ、だが一度その境遇を脱して幸福の境に移行する時、かつての同情心も消失するものである。だが松陰はさに非ず。許されて家に帰るや、尚此の11人の囚徒に対する愛憐の情やみ難く

「食を得れば則ち懐い衣を得れば則ち懐い、寒夜爐にあたれば則ち懐い、晴日庭を歩めば則ち懐い、之を懐うて心結ばれ未だかつて一日として釋然たるを得ず、嗟余之大罪猶獄を免るを得、而して前の十一人何ぞ独り得ざるや、且我繋ると雖、独り自ら楽しみあり、而して十一人は未だ必ずしも盡くは是有らず、則其心如何ぞや………」と痛歎し遂に立って之が放免に就いて蕃の要人に対し盡力し、やがてその努力が酬いられて囚人の大半はゆるされ、再び天日に浴する

事が出来たのである。誠に松陰の愛情は、之を施すに貴賤尊卑の別なく、求めて来る者は、拒むことなく温債親切を施したのである。

此の温かき愛の心こそ、彼をして期することなく、遂に一世の教育者たらしめるに至ったのである詢に松陰こそ、愛の教育者なりと称すべきであろう。

(2) 気 魄

真に人の魂を揺り動かし、その傘下に吸引するものは、人の気魄である。気魄とは、信念の発現であり、信念は人格のよって立つ根源である。

人類の師として、その光を永劫に放つ、ペスタロッチャーの波瀾にみちた一生は、詢に不屈不撓の男々しき戦であった。ノイホーフの貧民学校経営に敗れ更にスタンツの孤児院経営にも全身全霊を打ち込んで日夜苦斗を重ねたが閉鎖のやむなきにいたり、ブルグドルフにイフェルテンに、彼の生涯は詢に七転八起の奮斗をもって貫ぬかれている。彼をしてかくの如く、その生涯を男々しくも斗い通させた力は一体何であったのであろうか。それは、彼の内に燃える人類愛であり信念気魄の力であろう。

気魄とは、単なる一時の慷慨悲憤ではない。酒に酔い大声をはりあげて喧喧怒号する、又一興あり、されど冷めて己に帰る時、それは、唇寒し秋の風である。気魄とは、かかる軽々たる一時の感情ではない、千万人ありと雖ども吾往かんの死生を越えた境地であり強さである。

荒廃しゆくアテネの市民を、その頽廢より救済せんとして立ったソクラテスは、報国の丹心、独力を如何ともしがたく、弟子クリトンの救出の誘いをもたて、従容として毒杯を仰いだのであった。罵詈讕謔、四面楚歌の中にあり乍ら、毅然として屈する処なく、一切の毀誉褒貶に超然として死を求めたソクラテスの信念気魄こそ、数千年の今日も尚、吾々をして奮起せしめているのである。吉田松陰も又、かくの如きペスタロッチャーやソクラテスに劣らぬ信念気魄の人であった。以下彼の生涯の中から、そうした事蹟をあげてみよう。

◎嘉永6年6月4日、米艦浦賀に来るや、直ちにゆきて、その事情を探り、その身蕃の咎を受けているにもかかわらず、将及私言を著して対策を論じ藩邸

に至って君覽に供している。時人はその越権を誇り、之を罪せんとする者もいたのであるが、松陰の意とする処ではなかったのである。

◎安政元年正月、米艦再び来りて下田に投錨するや松陰は宮部、島山、永島等朋友にその決意を語り、首を鈴ヶ森に梟する覚悟をもって、米艦に乗り海外に亡命して、その事情を探らんとするのである。

“今日より各一事を成して、国に酬ひなば、其間成敗なきに非ずといえども何ぞ国脈を培養せざらん”と痛論流涕し、国家発展の捨石たらんと欲するのである。彼のこの空然の計画が破れて、金子重輔と共に獄囚となったが彼の大志は屈することなく、その苦境より更に孟気を發揮せんとするのである。

“世の人はよしあし事もいはづいへ
賤が心は神ぞ知るらん”

(岩波文庫吉田松陰書翰集94頁)

と江戸の獄中で感懐を述べている。

下田の獄より江戸に護送せられる途次、高輪の泉岳寺前を通りし時、

“かくすればかくなるものと知りながら
已むに已まれぬ 大和魂”

と誦し47士の霊を慰むると共に、その心境を歌っている。

◎安政元年と二年を野山獄に送り、その年末に実家に幽囚された松陰は、表面的活動を禁ぜられたが木原慎齋に与える書の中で次のように述べている。

「士生此世、隨才高下與学浅深、不各無所志、但遭逢事變、自安暴棄、是可悲也、僕在獄則論獄政、在邑則議邑学、特不欲自終于暴棄耳、非本志所也在」

即獄中といわず幽室といわず、自安暴棄しないのが松陰の生活態度である、故に野山獄においては、獄囚を誘って、孟子の講読を始め、幽室にあっては近隣の来る者を教導し、遂には松下村塾の隆盛を見るに至ったのである。ペスタロッチーにおける不屈不撓の精神と相通ずるものがある。

◎安政5年11月、間部老中要撃策に破れ、再び獄中生活をなすにいたったが、安政6年の春にかけての松陰は、その全生涯中最も精神的苦悩の多い時代であ

った。信頼する門人も意の如くならず、蕃政の要人長井雅楽を始め、周布公輔等も松陰と意見を異にしてあわず、安政6年4月14日、野村和作宛に次の書翰を送っている。

「……吾兩人死せば一時は流涕して呉れるものはあらん、併如何に感じてても吾目中には、吾輩程に志を篤くし、時勢を洞観したる人はなし、然ればうぬばれながら、吉田義郷為_レ神洲_レ自愛すべし、且今迄の所置遺憾なき事能はず、夫は何かと云うに、政府を相手にしたが一生の誤なり。此後は屹と草莽と案をかへて今一手段遣て見よう、然れば5年10年繋せられても吾尚40歳のみ、足下更に弱し、只今の縊死せうとまで思いたる志を終身忘れさへせねば事必ず成るべし。」と書し死の底より猛然として立上り、更新の意気を以て事をなさんとするのである。此処に二十一回孟子の面目がある。

松陰はかくの如く信念気魄の人であり情熱の人であったが、その日常生活においては、慎言勤行、大言壮語することなく、劇飲狂舞は、主は其の材を糜り、客は其の禮を失し、以って気合い意投ずと為す、是流俗之見、而して吾の取る所に非ざる也。と血氣の勇を禁じている。

◎安政6年2月松陰が、野山獄より諸友にあてた次の書翰は、之等の事をうかがうに最もよき資料である。

「中谷、久坂、高杉等へ示し度候、

平時喋々臨_レ事必唾、平時炎々臨_レ事必滅、孟子浩然の氣、助長ノ害ヲ論スルヲ見るべし八十送行ノ日諸友有_レ拔_レ劍者_レ又聞暢夫在_レ江戸有_レ斬犬之事_レ是等ノ事ニテ諸友氣魄衰茶ノ由ヲ知ルヘシ僕今死生念頭全ク絶ヌ、頭断場へ登り候ハハ血色敢て諸友ノ下ニアラズ、然レドモ平時ハ大氏用事、外一言セズ一言スル時ハ必温然和氣婦人好女ノ如シ是ガ氣魄の源ナリ慎言謹行卑言低声ニナクテハ大氣魄ハ出ルモノニ非ズ……」(全集6巻622頁書翰集)

右の書翰を以て見るに、松陰が如加に慎言謹行の人であったかを覗い知る事ができる。多言にして謀々する事を好まず、大声豪語、もって英傑を装う如きは、松陰の好まざる処である。

◎松陰が嘉永4年、第一回の江戸遊学にあたって記録している費用録を見る

時、吾々は松陰が真に慎言謹行の人であって、一般の志士の如く劇飲狂舞、大言壯語の人に非ざる事を痛感するのである。松陰は費用録の表紙に書いている。「口腹之欲、應感而発、見斯録也、泯然沮喪」と、即飲食の欲が志気を、如何に沮喪するかを自覚して、之を慎んでいるのである。費用録には次のように記されている。(全集7巻184頁)

27日

- | | |
|---------|------|
| 1. 拾 匁 | 蠻語箋 |
| 1. 壹匁八分 | 士道要論 |
| 1. 四 文 | 新漬大根 |

28日

- | | |
|----------|----|
| 1. 拾 六 文 | 鯛 |
| 1. 弍拾八文 | もち |

29日

- | | |
|---------|----|
| 1. 三 文 | しを |
| 1. 四 文 | す |
| 1. 四 文 | のり |

6月朔日

- | | |
|---------|-----|
| 1. 八 匁 | 美濃紙 |
| 1. 弍拾匁 | もち |
| 1. 四 文 | 大根漬 |

松陰の気魄は一時の暴虎馮河ではなく、日常茶飯時の中に、言葉を慎しみ、行を正し、その間に養はれる徳そのものが、気魄の源なのである。

(3) 旺盛なる求道精神

長田新先生は、日本における教育者の特色として先づ第一にあげておられるのは、修己治人、道を修め道を天下に伝える事をもって主眼としている。第二に実践躬行の人であると論じておられる。吉田松陰も又よく之に該当する教育者であったと言える。松陰の一生を通観するに、幼時より、兵学の師家として

の将来を背負っていたとはいえ、実に勉学の日々であり求道の日々であったと言える。彼の求道勉学は、獄中といわず、幽室といわず、旅行中といわず寸刻の間隙なく行われ続けたと言へるであろう。しかもかくの如き旺盛なる勉学の目指す処は何であったか、それは決して記誦暗記の学に非ず、又訓詁の学にもあらず、凡そ生れて人と為りては宣しく人の禽獸に異なる所以を知るべしというのが松陰の学問の態度である。

◎嘉永4年、22才の松陰は、兵学研究のため、蕃主に従って江戸に出ている。4月9日江戸に着いてからの松陰の研究は、詢に多忙を極め、寸暇もない状態であった。5月20日家兄に宛てた書翰を見てみよう。

「1. 馬術始め候事、付剣も折々遣ひ申候。

1. 会事の多きに當惑仕候。

1の日…良斎の書経洪範口義聴聞

3の日…武教全書初の方御屋敷内の方部、有備館にて

4の日…中庸同前初の方

5の日…朝、良斎易会撃辞上傳、午後莊原文助中庸会中程

9の日…良斎論語、郷党篇

7の日…呉子、林壽、藤態と

外

」(全集5巻書翰19)

以上のように22才の松陰は多会多忙の日々を勉学に送っている。彼は一党一派に拘泥することなく、常に総合的態度で学を求め、間もなく、洋学の研究にも心を向けている。8月家兄宛の手紙に、

「是迄、学問通も何一つ出来候事無_レ之、僅かに字を識り候迄に御座候、夫故方寸錯乱如何ぞ哉、先歴史は一つも知不_レ申此以大家之説を聞候処、本史を讀まざれば成らず、通鑑や綱目位にては垢ぬけ不_レ申由。二十一史亦浩漭なるかな、項日とばく史記より始め申候。

與地学も一骨折れ可_レ申。

砲術学も一骨折れ可_レ申。

西洋兵書類も一骨折れ可_レ申

本朝武器制も一骨折れ可_レ申

文章も一骨折れ可_レ申,

諸大名譜牒も一骨折れ可_レ申,

算術も一骨折れ可_レ申,

右思い出し次第記し見候得共、何一つ手には付居候事は一つも無_レ之、今から思い立ち可_レ申候へ共、何と定め諸事は棄てやり可_レ申事無_レ之候……」と書し、学問のなすべき範囲広くして、その身に付く処、乏しきを歎き、体中の骨何本有_レ之かは不_レ存候へ共、十本許りも折れ候はゞ跡は、いかを食い候猫のように成可_レ申哉と歎いている。(吉田松陰書翰集26頁) 22才の松陰は、前途程遠きを感じ乍ら、火の出るような勉学を続けたのである。

◎安政3年、松陰は、野山獄に囚人となったが、兄梅太郎を始め諸友に頼んで書を求め、野山獄読書記に書名を入念に記録している。之を分類して見たのが次の表である。

〔安政3年 読破書籍〕

(二十七才)

	経子類	日本史	支那史	詩文	経済医	地理	国学	兵学	西洋学	無類	部月計	冊月計
1月	0	1	1	1	0	0	0	0	0	1	4	58
2月	0	0	0	4	0	0	0	1	0	9	14	37
3月	1	2	2	1	0	0	0	0	0	5	11	38
4月	2	9	2	4	0	0	0	1	0	4	22	40
5月	2	7	2	4	0	0	0	0	0	3	18	31
6月	1	3	3	1	0	0	0	2	0	5	15	19
7月	2	5	2	4	1	1	0	0	2	9	26	44
8月	2	1	3	3	0	0	1	1	0	3	14	36
9月	0	2	2	2	2	0	1	0	0	4	13	42
10月	4	6	2	1	1	0	1	2	0	8	25	51
11月	6	2	2	1	0	0	1	0	0	2	14	50
12月	3	1	1	0	2	0	3	1	0	5	16	59
部門計	22	39	22	26	6	1	7	8	2	58	192	505

部門192の広範囲に及びその総冊数は、何と505冊の多きを数え、獄中とは云え、1年間にこれだけの読破をしているのである。驚くべき読書力である。

◎旅行中の訪問

松陰は又道を求むるには、宣敷く世の希傑の士を尋ぬべしとなし、到る処に偉人傑士を尋ね、論説を拜聴し、又世の更けるのも忘れて談じている。旅行中の訪問者を、その日記から調査し図表にしたのが以下の表である。

〔松陰旅行先での訪問者〕

旅行	期間	人数	主なる名士	文献
第一回 長崎紀行	自 嘉永 3. 8. 25 至 全 3. 12. 29	60 ^人	山鹿 万介、葉山 佐内、宮部 鼎藏、高島浅五郎 武富文之助	西遊 日記
第一回 江戸遊学時	自 嘉永 4. 3. 5 至 全 4. 12. 13	18	安積 良斎、古賀 茶溪、佐久間象山、斎藤弥九郎 宮部 鼎藏、山鹿 業水、鳥山新三郎	東遊 日記
東北旅行	自 嘉永 4. 12. 14 至 全 5. 4. 9	65	会沢 安、宮部 鼎藏、森田哲之助、青山量太郎 豊田彦二郎、大槻 格次	全上
第二回 江戸遊学途上	自 嘉永 6. 1. 20 至 全 6. 6. 9	68	谷 三山、佐久間象山、森田 謙藏、相馬 一郎 後藤 松陰、藤沢 昌藏、足代権太夫、三島真一郎 桂 小五郎	癸丑 日録
第二回 長崎紀行	自 嘉永 6. 9. 16 至 全 6. 11. 13	52	横井 小南、宮部 鼎藏、梁川 星巖	
第三回 東行	自 嘉永 6. 11. 24 至 全 6. 12. 27	11	梁川 星巖、森田 節齋、鶴飼吉左エ門、梅田雲濱 大久保 要	

此の表で見るに、8月25日萩を出発した21才の松陰は馬関を経て九州に上陸し小倉、黒崎、木屋瀬を経て山家に出、神崎、佐賀、嬉野を経て長崎に向かっている9月5日には長崎についている。平戸には、9月14日についているが直ちに葉山佐内を尋ね伝習録、辺備摘案を借用し、紹介された宿に持ち帰りその日の内に2冊の本を写している。平戸滞在は50余日であるが山賀萬助と葉山佐内に師事し、総計80冊の書を借用しその要点は抄録し乍ら、読破している。その間高島浅五郎、大木藤十郎、後藤又次郎等と会して談論風発、国事に関して意見をまじえている。帰途は長崎より諫早、島原と廻って熊本に渡り池部啓太、宮部鼎藏等と会し柳川に出て佐賀迄出向き、川等を訪れ意見を聞き又論じている。これらの人々を数えて見るに60人の多きに達するわけで、松陰の旅行は、常に書を読み、師友を求めての修練であって、

その旺盛なる求道実践の情熱と行動には頭の下る思いがする。

(三) 吉田松陰における教学の精神

(1) 立 志

◎立、志為、万事之源

安政二年正月、松陰は土規七則を作り従弟の元服の祝に贈っている。(一)凡そ生れて人と為らば宣しく人の禽獸に異なる所以を知るべし、と書き始め武士としての七つの則を教えている、最後に要約してこう言っている。志を立てて以て萬事の源と為す、と、即ち萬事の源は立志で、立志の如何によって真の学問となるか曲学となるかは、きまるのである。学問をなすには、如何なる目的で如何なる学問を為すのか、その始めにあたってしっかり決心すべきであると教えている。(全集二卷野山獄文稿)

◎求道、実践が学の道である

「井を掘るは、水を得るが為なり、学を講ずるは、道を得るが為なり。水を得ざれば掘ること深しと云えども井とするに足らず。道を得ざれば、講ずること勤むと云ども、学とするに足らず。困て知る。井は水の多少に在て、掘るの淺深に在らず。学は道の得否に在て、勤むるの厚薄に在らざることを」(新全集二卷講孟餘話)

即ち松陰にあつては、如何に深く掘っても水が出なければ、井の用をなさないと同じように、学は之を学ぶにその志が純粹で求道一筋でなければならぬ。地位や名声を得ることにあってはならないと強く塾生に説いている。「学問の道は人の禽獸に異なる所以を知るより要なるはなし。其異なる所以は五倫五常を得ると失ふとより外はなし。是を失ふを庶民とし、勤めて是を得るを君子とし、従容として自ら存する者を聖人とす……」と論じ五倫五常の道を実行する事が学の要である。(講孟餘話)

◎学は読書のみならず、実学である。学ぶに暇あらずという者は、暇ありと雖ども亦学ぶこと能はず而して又学は読書をもつて云ふに非ず、凡そ所、遭の

患難變故、屈辱讒謗、拂逆之事、皆天の吾才を老せしむる所以にして砥礪切磋之地に非ざるはなし。君子は當に之に処する所以を慮ばかるべし。徒らに之を免れんと欲するは不可なり」と言い

「山嶽に登り、川海を渉り、数十百里を走る。時ありてか露宿して寝ねず、時ありてか饑えても食はず、寒さにん衣らず、此れは是多少實際の学問なり。若それ徒らに明窓浄几、香を焚き書を読むが如きは恐らくは、力を得る処少からん」と力説し、只読書する事のみが学問ではなく、現実の生活の中で困苦、欠乏に耐える事が学問であるとし実践躬行を重んじている。

松陰曰く「茲に一書生あり、我勤学に倦めり、將に学を廃せんと欲すると、其師之に教へて曰く、全く廃せんより遊惰心に任せて、時に其の間を得ば、読書すべしと、余必ず傍より倚って言はん。学をなして斯の如きは、遂に功を見ることなし。全く廃するの勝れるに如かずと、若し一弟子あり、入りては孝、出ては悌、躬行の餘力を以て、2、3日の間、時に或は書を読み講ぜば、余將に其の志を憐んで、益々是を勵まし、一日を加うと云ども、己むに勝れりと云んとす。而して遂に読書の功を得ん者は、前の一書生に在らずして後の一弟子にあること必せり」(講孟餘話)

学問は実践躬行で怠惰な気持では、読書しても、それは何の役にも立たないというのである。孝悌の道を修め、行を積んでいる者であれば一日二日の僅かの読書と雖ども、それなりに功がある、学問の要は、読書そのものではなく実践する処に真の価値があると松陰はいうのである。

(2) 殉忠愛国の精神

松陰の一生を通覧するに、彼程その一生を至誠奉公、死而後己の殉国精神に徹したる士はないであろう。

「士大夫、志を為すには、死生甚だ小なり、道義甚だ大なり。道に違ひ義に戻り徒らに生を愉しむ、何ぞ羞恥之に加えん」と称する松陰は二十一回猛士と号し、生ある間に、一朝事あれば猛気を振って之に当り21回も之を行へば、事たりるであろうかと覚悟の程を決めているのである。

◎第三回の用猛事件と松陰が称する安政元年3月5日の米艦による海外遊学事件を見るに、回顧録(全集七巻)の中に次のように述べている。

即ち兄梅太郎には心配をかけないように、しばらく鎌倉にかくれて修学するからといって別れを告げ、3月5日江戸京橋の酒樓にて来原良藏、赤川淡水、坪井竹槌、白井小助、宮部鼎藏、其の他、佐々木、松田、永鳥等の諸友と会し、席上松陰は海外渡航の件を語って意見をきいている。熱論討議、容易に決論がきまらず、永鳥日く、勇銳力前は吉田君の長所である、縝密持重せよといったも、中止する事はなかりう、と言うに至って衆議は一決している。「丈夫有_レ所_レ見、決_レ意為_レ之、富岳雖_レ崩、刀水雖_レ竭亦誰移_レ易_レ之_レ哉」と松陰は揮毫している。佐々淳次郎は痛哭流涕し神州はまさに、累卵の危きにいたる、君は之を如何にして救わんとするのかと、松陰も又感極って涙を流し遂に誓って「寅(松陰)已に断然危計を行ふ。固より自ら期す、一跌して首を鈴森に梟することを。然れども諸君今日より各一事を成して國に酬ひば、其間成敗なきに非ずと云ども、何ぞ國脈を培養せざらん、如何々々」と。宮部鼎藏は自分の刀と松陰の刀とを交換し、「皇神(すめがみ)のまことの道を畏みて、思つゝ行け思つづつけ」と歌を送っている。

松陰は、国禁をおかしても米艦に乗じて、外_レ國の事情をつぶさに探らねば、外艦に対処する方途は出てこない。万一米艦より送り返されるような結果になれば、その時は天運とあきらめて罰を受けるのみと肚をきめて踏海を計ったのである。事成れば各地にわたり、各地の状況を視察して帰れば、お国のために大いに役立つであらうというのが決意の要点である。

◎間部老中要撃策(第四回用猛)

安政5年、井伊直弼大老となり、6月19日、日米通商条約に調印す、松陰は此の時29才、村塾に在り、門人増加して塾舎狹隘となる。3月に門人と協同して増築をはじめ。松陰は外夷撻伐の急務を論じ藩主に対策を書し、狂夫之言。時義略論。等を献ず、又9月9日には江戸の松浦松洞に書を送り、水野土佐守

暗殺の策を受け、又10月には赤根武人を亡命せしめて京都伏見の獄を破り勤皇の志士を救済せんと画す。11月6日には同志17名と血盟して老中間部詮勝を要撃せんと謀り“願書案文”を藩府要人に示し援助を求めている。当時間部老中は、京都にて志士捕縛の任にあたり、その暗躍は、王事に勤むる者の痛憤おく能はざる所であった。

上_二家大人玉叔父家大兄_一書（全四巻、戊午幽室文稿）

によって、松陰が玉木叔父並びに父と兄とに書を作り、永訣の決意をのべている。之を要訳して松陰の叔父に対する心情と国難に奉ぜんとする情熱とを見てみたい。

頑児矩方泣血再拜して家嚴君、玉叔父、家大兄之膝下に白す。矩方稟性虚弱、続いて篤病にかかり、幸にして病に死すこともなく今日にいたり、しばしば国犯を重ね不孝の罪謝するに餘りありとし、29年間を回顧するに死すべき事多きに今日迄死にもしないで、今日尚かかる事にて累を父兄に及す事誠に不孝、その罪、詢に重しとし。然し皇家の存亡にかかわる事にて休止する事能わずとし、今日の幕府、違勅以て四夷の言に屈し、井伊間部の罪、許すべからずと痛論し、然して、天下の士夫安然黙居して、その為すことなきを歎じ、神州の正気既にやみ、邪気の消蝕する所となる。頑児一念此に至り、食すれども咽を下らず、寝ぬれども尊に安んせず。唯一死の早からざるを悲しむのみと悲憤し、間部の首を得て之を竿頭に貫ぬき、上は以て吾公勤王の衷を表はし下は天下の士民の公憤を発し而して旗を挙げて闕に趨き首魁となる。是の如くして死す、死して猶生くるが如し。と論じ且つ梁川屋嚴を通じて、その著す所の愚論対策が畏多くも、乙夜の覽を辱ふしたるに感涙し、兇死するの何ぞ晚きやと、身を鴻毛の軽きに比し……末文にては、不孝の子、唯慈父之を愍み給へ、不弟之弟唯友兄之を恕し給へ

此の書翰を読むに、松陰は伊井大老が四夷の言に屈して勅評もまたづに開港した事を痛歎し、天下の志士が安然として黙居しているのは何たる事ぞと叫び、松陰は食すれども咽を下らず、寝ても寝つかれないと悲憤し、間部老中の首を竿頭に貫ぬけば天下の士民も公憤を発して後に続くであろうと死を決して首魁

たらんとするのである。だが29才の今日迄育てて下さった父や叔父に対し、先立つ不孝の罪を切々として述べている。親子の情の切なる、まことに一言一句、肺腑を刺さるるの思いがするのである。

遂に事ならずして、松陰は再び、野山獄に投ぜられたのである。

獄中の松陰は、益々一死奉公の期する処あり、愛弟子入江和作をして出京せしめ、大原三位の西下策を謀れども和作は破れて遂に獄に投ぜられ、子弟の中には松陰の策とあわず時期尚早として時務論を異にする者も出で、松陰の憂悶やる方なく、食を絶ちて獄中に死せんとし、又賜死の周旋を門人に依頼したりもしているのである。和作に宛てた書翰の中に、「僕が死を求むるは、生て事をなすべき目途なし。死で人を感じずの一理あらんかと申す所と、此度の大事に一人も死ぬ者なき、餘りもく日本人が臆病になり切たが、むごいから、一人なりと死で見せたら朋友故旧生残た者共も少しは力を致して呉ふかと云迄なり」(吉田松陰書翰集(岩波)81)と論ずる。誠にその一死奉公の心情は烈々として死を辞せずの心情か吐露されている。

◎江戸入獄前後

安政6年5月14日、松陰は、江戸の獄に護送せよとの幕命を受くるに到った。此の日野山獄にいた松陰は諸妹に宛てた書翰の中で「拙者此の度假令一命差捨候共、国家の御為に相成事に候はゞ本望と申ものに候、両親様へ大不孝之段は先日申候様、其許達被_レ仰合_レ拙者代りに御盡し可_レ被_レ不候」といい、又15日、父百合之助に宛てては「此度之東行は国難に代るの存念に御坐候得ば、兼ての狂悖(きょうはい)には随分出かしたると存じ奉り候。尤も幕吏對訊の事も御座候はば、正義と至誠とを以て百折挫せず、機に随ひ應接仕るより外之れなく、全く許直(けっちょく)激烈を宗とする譯には之れなく候間、何も御放念遊ばされ、不孝の段は御海恕祈り奉り候なり。」(全集、6巻書翰747)

と書き送っている。

10月25日、愈々處刑の近きを知り、松陰は門人子弟に対する最後の教訓とな

るべく留魂録を書きのこしている。

“身はたとひ武蔵の野辺に朽ぬとも

留置まし 大和魂”

と辞世の句を冒頭に掲げ、至誠而不_レ動者未_レ之有_レ也の句において、身を以て之を驗せんとすれども遂にその成らざるを記し、間部要撃の事に関しては、その累の門人子弟に及ばざりしを喜び、……奸権の爲めに死に到ると雖ども、天地神明照鑑上にありとして、従容として死に就くの態度を示し、最後に、

“討れたる吾をあわれと見ん人は、

君を崇めて、夷(えびす) 拂へよ”

“七たびも生かえりつゝ夷をぞ

攘はんこゝろ吾忘れめや”

と歌い、楠正成と同じく七生報国の念を書し、明27日刑場への呼出の声に、

“此程に思定めし出立を

けふきくこそ嬉しかりける”

と懐紙に認め、静かなる裡に壮烈なる30年の生涯を閉じたのである。

「子としては孝に死し、臣としては忠に死し仰ては皇国の大恩に報じ俯しては、一身の職分を盡さんと日夜に志を勵まし、学を勤めば其正学たるに負かじ」と講孟餘話に論じ、或いは又「先一心を正し、人倫の重きを思ひ、皇国の尊きを思ひ夷狄の禍を思ひ、事に就き類に觸れ、相供に切瑳講究し、死に至るまで他念なく片言隻語も是を離るゝことなくば、縦令幽因に死すと雖ども天下後世必ず吾志を継ぎ成す者あらん」と論じ、終始一貫、只一身を、忠孝の二字に捧ぐるこそ、松陰の変らざる態度である。

(3) 学問の態度

1. 正学と曲学

正学と曲学の問題は、立志如何の問題を離れて、客観的に学そのものを正論か曲論かと考察するもので、立志とは正学を学び曲学を排する学ぶ者の意識の問題である。

「今茲に一人あり、眞に志を立て己を益し人に益せんとの心なれども、偶々正学を知らず曲学を主とする者あらば、豈一概に之を非とするを得んや、又その学ぶ所正学に似たれども其志却て名の為にし利の為にする者ならば亦一概に之を是とするを得んや」と松陰は講孟餘話の中に論じている。

即ち学はそれを学ぶ者の志が基本であるが此処では、何を正学とし何を曲学とするのか、立志を離れて客観的に学そのものを論せんと欲するものである。

「学問の術固より端緒多し、訓詁の学あり詞章の学あり、考據の学あり、老佛の学あり、是を皆曲学とす……吾黨の志とする義理經濟の正学と異なる」と論じている。(新全三餘話 p.45)

松陰の所謂、正学とは義理經濟の学である。義理の学とは即ち人倫の道であり人倫である。

「学問の道、人の禽獸に異なる所以を知るより要なるはなし。其の異なる所は、五倫五常を得ると失ふとより外はなし。是を失ふを庶民とし、勤めて是を得るを君子とし、従容として自ら存する者を聖人とす。衆人と云ども勤勵すれば君子となり、其功の熟するに至ては、即ち聖人なり、禽獸に陥ると聖人君子に升るとの分は、所_レ以_レ異_レの三字にあり……」

正学とは人倫の道を究め、之を行ずる処にあり、義理とは即ち人倫である。

經濟とは、楽しむに天下を以てし、憂ふるに天下を以てする經世濟民の事である。義理の学が修己の学であるのに対し經濟は治人の学である。

「凡そ聖学の主とする所、修己治人の二途に過ぎず、故に伊尹の志す所を志し、顔淵の学ぶ処を学ぶと言ひ、又志を立てるには、明道希文を以て主体となすと言ふも此主義にて顔淵、程明道皆聖人とならん事を学べる人なり、是れ修己の学なり。伊尹、范希文は皆天下を以て任とする人なり。之治人の学なり」と餘話に論じている。

松陰は、此の修己治人において、最も修己の事に工夫するを主体とし、学の要は人を治めんがため、又は一世の師表となり他を導かんが為にするに非ずして、己を正しくする事が肝要で、己正しくして、期せずして他に及ぶべきであるというのである。

「人の師とならん事を欲すれば、学ぶ處己が為に非ず、博聞強記、人の顧問に備るのみ、而して是学問の通患なり。吾輩尤も自ら戒しむべし。凡学をなすの要は己が為にするにあり、己が為にするは君子の学なり、人の為にするは小人の学なり。而して己が為にするの学は、人の師となるを好むに非ずして自ら人の師となるべし、人の為にする学は、人の師とならんと欲すれども遂に師となるに足らず、故に云く、記聞の学は以て師となるに足らずと」(講孟餘話 p.102) (新全集三卷192)

かくの如く松陰の態度は詢に純乎たるもので地位名声を得る為のものではなく、真に己の徳を磨かんとする純潔なものであった。

「今の士大夫・学を勤むる者、若其志を論ぜば、名を得んが為と、官を得んが為とに過ぎず、然れば功效を主とする者にして、殆んど義理を主とする者と異なり思わざるべけん哉、嗚呼世に読書人多くして真の学者なき者は、学をなすの始其志已に誤ればなり」と痛論している。今日此の弊益々顕著にして、高位顕官に在る者自戒自肅して松陰の教に耳を傾むけねばならぬ。梨園に笠の紐を結ばず、瓜畑に靴の紐を結ばずと、いささかの疑はしき行為もなさぬのが君子の道とされた純潔日本の姿は、今いづこにもなく、総理大臣から市長村長、議員に至るまで、汚職日本の名を天下にさらしているのである。

安政元年10月、松陰野山獄に入る、士分の者であるが、当時11名の囚人がいた。短きは3年、長きは49年に及び、生涯天日を仰ぎ見る希望もない囚人達であった、松陰は25才、最年少の新人である。明るる年の4月12日からそれらの囚人に対して孟子を講じている。

日く「今且諸君と獄中に在りて学を講ずるの意を論ぜん、俗情を以て論ずる時は、今已に囚奴と成る、復た人界に接し天日を拜するの望みあることなし、講学切劔(せつび)して成就する所ありと雖も何の功效かあらんと云々。是れ所謂利の説なり。仁義の説に至りては然らず。人心の固有する所、事理の當然なる所、一として為さざる所なし。人と生れて人の道を知らず。臣と生れて臣の道を知らず。子と生れて子の道を知らず。士と生れて士の道を知らず。豈に恥づべきの至りならずや。若し是を恥づるの心あらば、書を読み道を学ぶの外

術あることなし。……今の士大夫、学を勤むる者、若し其の志を論ぜば名を得んが為めと官を得んが為めとに過ぎず……世に読書人多くして眞の学者なきものは、学を為すの始め、其の志已に誤ればなり……」(新全三餘話23頁)

松陰における学問の態度が如何に純潔崇高なものであったかを、吾々は囚人教育においても感ずるのである。一切の功利を超越してひたすらに人の人たる道を求むる事こそ松陰の学問の道である。

「今諸君と幽囚に辱しめらるゝと雖ども、幸に孟子の書を講ずるを得、何の幸か是に加へん、若し天下を以て任とせんとならば如何、先一心を正し、人倫の重きを思ひ、皇国の尊きを思ひ、夷狄の禍を思ひ、事に就き類に觸れ相共に切磋講究し、死に至る迄、他念なく片言隻語も是を離るゝ事なくんば、縦令幽囚に死すと雖ども、天下後世必ず吾志を継ぎ成す者あらん、是れ聖人の志と学となり。其他の榮辱窮達毀譽得喪に至ては、命のみ、天のみ、吾が顧る所に非ざるなり」(餘話 p.34) (新全三 p.52)

即ちたとい囚人となっているからといって人の人たる所以を学ばなければ禽獸にかわる処はない、獄囚の身、学んだ処で再び天日を仰いで通常の世界にもどるわけでもないし、又立身出世する事もない人だから、学問なんか無駄ではないかと思うかもしれないが、決してそうではないんだと、松陰は切々として説論し、遂に彼等を学問の道に導き入れ、獄吏の福川犀之助も皆んなの後ろから講議を聞くに至ったのである。

2. 総合的態度

松陰はよく陽明学派に属する学者であると言われる事がある。それは、松陰の師佐久間象山が陽明学者であり、又平戸にて教を受けた葉山佐内が陽明学で、両者の学風を松陰が多く受けているとするからである。然し松陰の学問は一派一家に拘泥するような偏狹な態度ではなく、西洋学であれ、朱子学であれ、或いは又国学であれ仏教であれ、それが取って以て、我に益する所あれば、之を排除する事なく、採用するというのが松陰の態度である。

安政6年10月20日、入江杉蔵に宛てた書翰の中に、

「……朱子学じゃの、陽明学じゃのと一偏の事にては、何の役にも立ち申さず、尊王攘夷の四字を眼目として、何人の書にても何人の学にても、其の長ずる所を取る様にすべし、本居学と水戸学とは頗る同じからざるものあれども、尊攘の二字はいづれも同じ、平田は又本居とも違ひ癖なる所も多けれども、出定笑語・王禪等は好書也、関東の学者道春以来、新井、室、徂來・春臺等皆幕に倭しつれども、其の内に1、2ヶ所の取る可き所はあり、伊藤仁斎等は尊王の功はなけれども、人に益ある学問にて害なし、林子平も尊王の功なく、攘夷の功あり、兼て御話し申候高山、蒲生對馬の雨森伯陽魚屋の八兵衛の類は実は大功の人なり」(岩波松陰書翰集100)

と論ずるように、学問の道において大切な事は、その学派の如何ではなく、それが皇国の人間としての実践上に如何に役立つかという事である。松陰は西洋究理の学について、次の様に論じている。

「近世、西洋究理学を修する者、孔子も日食を知らざるとて、聖人を誹り、天動地静の説を以て周易を議し、又儒を学ぶ者も是等を以て聖人の恥とするに至る、其誹るも恥るも皆瑣事小説にして、其道に於て軽重なきは同じき也、今更云も事新しけれども、道の大本を云はゞ、人と生れては、人たる所以を知り、五倫を明にし皇国に居ては皇国の体を知り、本藩に仕ては本藩の体を知り以て根基を建て扱其上にて人々各其職掌を治むべし、儒官は經史を博覽精究し、天文家は天文、地理家は地理、医家は医術、画家は画法……角の如く、大小綱目井然書定する上は、西洋究理学の如きも亦自ら世に廃すべきに非ず、而して又瑣小の事を以て聖人を誹議するに至らぬなり……」(餘話 p.238)

かくの如く松陰は、その家学たる兵学の研究は勿論、朱子学、陽明学に拘らず国学をも読み、経済にも通じ、或いは農林に或いは地理に、又象山に就いては西洋学をも研修し、採長補短以て総合的態度の研究を進めていったのである。

読浮屠虞渊護法小品という書の中において、西洋学は即儒佛の排斥する所なれども、天文医術、曆法等皆形の上の事にして、理に非ざれば仏教を害するの事もなく、又天地効祀四象八卦等儒教は、即理なれば、日月天地の球たるを論ずる西洋学も儒を害する事なし、而して儒仏は神道と鼎立するものに非ずして

神道を君とせば儒仏は相なりと論じ神道も今日流れて巫祝の流となれり、と歎じている。

かくの如く松陰は、陽明学というより総合的な態度の学で皇国を中心とする忠孝の人倫を究め之を實にせんとする学である。

(4) 師道観

講孟餘話や幽室文稿、書翰集、日記等に於ては、国体観、学問観、人生観等に就いての論述をかなり深くつっこんで覗き知る事が出来るのであるが、師道観については、その論ずる所、少く、松陰の教育実践を通して知る事が適当であるように思われる。

是は、松陰の論にもあるように、自らは師を以て任じてはいないからである。松陰の学は修己治人の学で、己を修むる自然の姿の中に後輩諸子の学ぶ者がついてきたのである。即ち先輩後輩という形の中で子弟に対して接したのである。

松陰は30才の若さでその生涯を終ったのであるが、師をもって任じたのではなく、その燃ゆる如き至誠奉公の精神と、死而後己の熱烈なる求道的精神とが相まって青年子弟をひきつけ、温情溢れる彼の愛情が、接觸期間の長い短いをとはず、薫化していったと思われるのである。

孟子曰く人之患ハ在_レ好_レ為_レ人ノ師_ニ、松陰は此の章に註して曰く「人の師とならん事を欲すれば、学ぶ所己が為に非ず、博聞強記、人の顧問に備るのみ、而して是学者の通患なり、吾輩尤も自ら戒しむべし。凡学をなすの要は、己が為にするにあり。己が為にするは君子の学なり、人の為にするは小人の学なり。而して己が為にするの学は、人の師となるを好むに非ずして、自ら人の師となるべし。人の為にするの学は、人の師とならんと欲すれども遂に師となるに足らず、故に云く、記聞の学は以て、師となるに足らずと、是なり」(講孟餘話 102頁)

今日の教師は吾を含めて常に人の師たらんとして学び、その学又熟せざるに教壇に立たんとす。修己未熟のままに、治人の道をふまんとす、之が現代にお

ける教学不振の根源である。

「……後世師道敗壞す。本邦太宰徳夫も亦師説あり、而して近時に至り師道益々廢す余因て其源を洞察し、亦一説を得たり、大抵、師を取る事易く、師を撰ぶ事審ならず。故に師道輕し、故に師道を興さんとならば、妄に人の師となるべからず、又妄に人を師とすべからず、必ず眞に教ゆべき事ありて師となり、眞に学ぶべきことありて師とすべし。熊澤了介の中江藤樹を師とするが如きは、師弟共に各其道を得ると云べし。且道は古聖賢大抵言盡せり。行盡せり、今の学者多くは其書を觀て口眞似をなすのみ、別に新見卓識古人に駕出するあるに非ず、然れば師弟共に諸共聖賢の門人と云ふものなり。同門人の中にて妄りに師と云ひ弟子と云ふは、第一古聖賢へ對して憚り多きことならずや。佐藤直方の師道を以て居らざる、實に感ずるに餘りあり……」(餘話 p.74)

松陰は、師道の輕薄にして振はざる所以は、師となること易く又師を撰ぶこと審ならずと歎いているのであるが、今日師道の頽廢甚だしく、学園は變じて暴挙の巷と化し教師の權威地に墮ちて見る影もなしの学校各地に多発す。現行制度の下にては、親子共に好まざるに師とせざるを得ず、敬慕して師と求めても師とするを得ず。学校は形だけの形骸となり、子弟は塾へ塾へと方向をかへ、塾は人間教育の何たるかを考慮する事なく学力偏差値の向上を計らんとする。まことに、憂慮に堪えないのである。

松下村塾は、国禁を犯して投獄せられたる一青年教師である。それにも拘らずその学を慕いその人格を敬する若き青年である。師と選ばれたる松陰は、師を以て任じたのではない。師自らが己の修養の足らざるを懼れつつ日々夜々勉めて止まぬ篤学求道の士である。此の師弟兩者の間にかもし出される切磋琢磨の学習が如何に理想的な教育であったかは、論ずる迄もないことである。